



若女将紗羽子

すすり泣きの宿

筆祭競介

挿絵／御垢葉ひかる

立ち読み版

KTC
KILLER COMMUNICATION



Contents

目次

第一章	老舗旅館の美人女将	4
第二章	取引される女将の貞操	28
第三章	陵辱にすすり泣く女将	71
第四章	尻責めに堕ちる人妻女将	108
第五章	マゾ華を咲かせる牝女将	147
第六章	若女将、首輪のおもてなし	181
終章	夫を目の前にして	248

登場人物

Characters

岬 紗羽子

(みさき さわこ)

和服の似合う人妻。高級旅館の女将。楚々とした美貌で、従業員への物腰も柔らか。夫を陰に日向に助け、旅館を盛り立てていこうとしている。

岬 総一

(みさき そういち)

若くして名門旅館を引き継いでいる、紗羽子より一つ年下の澁刺とした好青年。

如月 数馬

(きさらぎ かずま)

軽薄で遊び人風の雑誌記者。ヒロインの大学時代の先輩。

西村

(にしむら)

ヒロイン夫婦が経営している旅館の会計係。

男のアナルに対する病的なまでの執着が、愉悅の業火に包まれた女体をさらに燃え上がらせる。全く愛撫を受けていないヴァギナが潤み、太腿の内側を濡らすほど蜜液を滴らせていた。

「も、もう、辛抱たまらん！」

西村の上擦った声が聞こえた直後、肛門の入り口をえぐり続けていた舌が消えた。

片手で口許を押さえ喘ぎ声を漏らさぬように必死に耐えていた全身から、ホツと力が抜ける——しかし、それも束の間だった。

西村の唾液でふやけきつた皺穴に、グツと熱い強張りが押しつけられる。今まで躍り狂っていた舌とは、明らかに硬さも太さも違う。

ペニスだ。

西村の猛った生殖器官が、自分の排泄器官に押し当てられている。

「いやっ、な、何を考えてるのっ！」

紗羽子は激しく抵抗した。

「あ、暴れるなっ！ こ、このエロい尻をナイフで切り刻まれたいのかっ！」

このセリフで男が刃物を持っていることを唐突に思い出させられる。西村にそんな度胸があるとも思えないが、何しろ極限状態である。

紗羽子が判断に迷い、動きを止めたのを服従と考えたのだろう。再度、後ろの小穴に男根が押しつけられた。強烈な違和感の後に、ぴりっと痛みが走る。

頭で考える前に、身体が激しくもがいていた。

「や、止めてっ！ い、痛いっ。それだけは止めて！」

涙ながらに訴えると、腰を掴む西村の手の力が緩んだ。

元は気弱で、暴力沙汰の苦手な男である。

「……そ、それなら、わ、私の……ク、クビを撤回してくれますか？」

だからこそと言うべきか、相手の足元を見て取引を持ちかける狡猾さを持ち合わせていた。

「……っ……」

紗羽子が言葉に詰まると、再びアナルに熱い強張りが押しつけられる。

如月に続いて、西村まで――。

女と生まれたばかりに、なぜこうも理不尽な取引を持ちかけられなければならないのか。きつく閉じた瞼の裏から、熱い涙が溢れ出す。

「ど、どうなんですか」

男の声が切羽詰まっていた。脅迫のために凶器を喉元に押しつけるように、後ろの

小穴に肉棒をグイグイとこじ入れ始める。

排泄専用の肉器官に、異物が侵入してこようとしている。

「わ……わかったわ！　だ、だから、それだけは止めて……」

とにかく肛門を犯されることだけは嫌だった。そんな変態的な行為だけはしたくない。たとえ総一にねだられても、間違いなく拒否している。

西村にそれを許すなど、想像しただけで発狂しそうだった。この男の解雇に関しては、この場さえやり過ごせば、なんとでもなるという計算もある。

紗羽子の答えに、アナルに押しつけられていた強張りが去った。

全身を包んでいた緊張が解かれた——その直後。

「えっ!?　い、嫌っ……嫌あああっ!」

西村の男根が今まで見向きもしなかった、ヴァギナの入り口を探っている。相手が刃物を持っていることも忘れ、反射的に身体を逃がそうとしたが、ウエストをがっちりと掴まれていてそれもままならない。

思わず紗羽子が振り返ると、西村は性欲に血走った目で自分の尻を凝視していた。

「約束が違うわ！　解雇しないかわりに犯さないって言ったじゃない!」

「それは尻の穴についてだけだ！　こっちの穴は坊ちゃんや、あの雑誌記者に好きな

ようにハメさせてるんでしょ！ わ、私だけダメなんて不公平だ！」

無茶苦茶な理屈を捲し立て——ずるるんっ！

西村が一気に紗羽子を貫いた。

後ろを向き睨んでいた美貌が「あぁんっ！」と官能を叫び、弾かれたように前を向く。たっぷりと牝肉の詰まった双丘が、小男の下腹に打たれて大きく波打つ。

二十九歳の女主人と、五十五歳の使用人が一つに繋がった瞬間だった。

「おおおっ、す、凄いつ……おおっ、な、中がう、うねって……おおっ、ヒダヒダがちゃんぽに、か、からみついてくるっ……こ、こんなの、は、初めてだ……」

如月と全く同じ感想を、同じ陵辱者が漏らす。

今まで男性経験が総一しかなかったために自覚はなかったが、どうやら自分は相当の名器の持ち主らしい。

「おおおっ、おおおっ」

膝立ちの男が、愉悦の声を上げながら腰を振り始めた。自身が刻みつけたキスマークと、塗りつけた涎にまみれた尻を激しく揺さぶる。

そんな小男の動きは荒々しいが単調で、自分の獣欲を満たすための忙しないものだった。如月のような、憎らしいほどのテクニクは欠片もない。

それなのに感じてしまう。乳房と尻をたつぷりと責め抜かれ、性感をグツグツになるまで煮込まれた女体が嫌でも反応してしまふ。

喘ぎ声を抑えるのも——もう、限界だ。

「っ——っんっはああっ！ ああああっ！ んはああああああっ！」

親子ほど歳の離れた二人の男女は、獣の体位で激しく交わりながら、性の愉悅を獣のように叫び合った。

帯はきちつと締めたまま、和服の裾を捲られ尻を激しく抱かれています。後背位で犯されながら、その姿勢を維持するために白足袋が必死で畳を噛み締めていた。力の籠ったふくらはぎの盛り上がり、犯される女の哀れさと淫靡さが漂っている。

——身体の内側をアレで削られるみたい。歳の癖に……なんて硬いの！

中年男の肉棒は、娘のような歳の女主人を犯す下剋の欲情に漲りきっていた。

「は、初めて女将を見た時から、ずっとこうしたいって思ってたんですよ。おおおうっ。この抱き心地は想像以上だ。突けば突くほど、自分から絡みついてくる」

黙々と事務仕事をこなしながら、横目で自分を窺い、その薄くなった頭の中で様々な痴態を思い描いていたのだろう。

紗羽子が嫁いできてから、この男が懐いだき続けていた欲情を腰の一振りごとに叩きつ



けられる。普段が物静かなだけに、内に秘めた劣情のドス黒さは、誰よりも深くそして濃密だった。

「ああっ！　そ、そんなに激しくっ……ああっ！　壊れるううっ！　アソコとお尻がっ、こわれちゃううっ！」

あまりに苛烈な西村の突入に、紗羽子の顎がガクガクと揺れ続ける。

後ろで纏めた黒髪が僅かにほつれ、赤く染まったうなじを幾筋か黒く彩った。西村にしゃぶり尽くされた乳房が激しく揺れ、舐め尽くされた肛門がきつく窄まる。

「感じてますね？　私とのセックスでっ、ほ、ほらっ、こんなに感じてるんですね？」
女を犯す男は、なぜ同じことを同じ口調で聞いてくるのだろうか。如月も自分を抱きながら、欲情を絞り出すようにこう尋ねてきた。

紗羽子は必死に顔を横に振る。

しかし身体は反応してしまふ。真後ろからの衝撃で淫らに波打つ牝尻の下では、臀部の筋肉群が愉悅のためにビクンビクンと小刻みに痙攣し続けていた。その振動はウエストを掴む両手だけではなく、蜜壺を深くえぐる男根にも響いていることだろう。何より自身を犯す肉棒に、膣壁たちが甘えるように絡みついていた。

——こんなのって……あまりに惨めすぎるわ……。

自分が女に生まれたことを呪いながらも、西村の男根で最深部を突かれると、条件反射で「あああつ、あああつ」と官能的な母音を口が連ねてしまう。

その響きは総一に抱かれている時よりも遙かに艶っぽく、そして淫らに聞こえた。

レイプをされる女性性は、犯されているショックを緩和するため、特殊な脳内物質が発生し、通常ではありえない感度で反応してしまうという眉唾ものの記事を、如月の雑誌で読んだ覚えがある。その時はくだらない内容だと思ったが、今の自分がまさにその状況なのかもしれない。

夫にすら見せたことがない痴態を、不正を働いた部下に晒していると思うと、凄まじい自己嫌悪が胸の底から湧き上がってくる。あの爬虫類染みた薄い瞳に、自分の尻を抱かれながら、粘りつくような視線で見下ろされているのだ。しかし――。

「おおうつ！　いくら私がイイからって、そんなに締めつけないでください」

肉悦の業火で燃える女体にとって、それはドス黒い炎を上げる燃料でしかなかった。マゾの愉悦が全身を駆け抜け、耳を覆いたくなるような官能の声を自らの喉が絞り出す。その喘ぎ声に合わせて揺さぶり続けられている臀部は、尻えくぼを強く引きつらせ卑猥に何度も跳ね回る。

「あああつ！　み、見ないでつ！　き、聞かないでえええつ！　今の私は違うのつ！

今の私はっ……あああつ、忘れてっ……このことは全部忘れてええええっ！」

快感の赴くまま無意識に動く人妻の尻は、夫以外の男を迎えた喜びに打ち震え、自らくねり始めていた。

「ひっひひひっ！ 何を言ってるんですか！ こんな凄い女将の姿、一生、忘れられるわけないじゃないですか！」

獣の体位で激しく身悶える人妻の姿に興奮し、男の動きもガムシヤラに乱れ始める。自分の給料を払っていた女主人に欲情を叩きつける、下剋上の炎に燃えていた。

二人とも涎を垂れ流しながら快感を叫び、繋げ合う性器同士を、滴る愛液が白く泡立つほど激しく擦り合わせる。

それはまさに畜生の行い。親子ほど離れた歳の差も、主人と使用人という関係もない。ただただ肉の交わりに耽溺する、牡と牝の姿がそこにあった。

「も、もうたまらない！ い、いきますよっ、お、女将の中でっ……おおう、い、いきますよお！」

西村の切羽詰まった喘ぎ声が、限界を宣言する。

セックスを始めて僅か数分であったが、紗羽子の名器を欲情の赴くまま貫いていてはこれも仕方がなかった。総一も持続力は似たようなものである。

ただこの言葉を聞いて、緩みきっていた紗羽子の瞳に一筋の理性が戻った。肉悦に沸き立っていた背筋が、冷や水でも浴びせられたように粟立つ。

「だ、だめっ！ なかはだめっ！」

しかし爆発間近の男の劣情を、その程度の言葉だけでは止めることができない。

女主人の必死な言葉にますます興奮したのか、二人の肉がぶつかり合う音の間隔が、ますます短くなっていく。感度の上がりきった膣壁たちが、剛直しきった肉棒に内側から磨り潰され、紗羽子の理性は再び吹き飛びそうになる。

背徳のセックスがもたらす陶酔の極みに、性に熟れた女体が沈みかけていた。

如月相手に中出しされなかつた時の記憶が、満足できなかつた女体の疼きと共に蘇る。

あの時の物足りなさ。僅かな渴き。全身に甘露を浴びているような今の状況では、それを餓死寸前の飢えの苦しみのように思い出してしまふ。

このまま西村の激しい突き入れの後、子宮に熱い肉汁を注がれれば――。

本来ならば身の毛もよだつような想像が、甘美な未来図となつて脳裏をかすめる。

――だ、だめっ……わ、私は何を考えているの！

紗羽子はガクガクと前後に躍る首を、必死に左右に振つた。一瞬の思考で陥りかけ

た淫欲の底なし沼から、なんとか顔を上げる。

セックスの快感で煮立っている頭を必死に働かせた。

「あ、危ない日なのっ！ も、もし、それでアナタのことが主人に知れば、二人とも、ここにいられなくなるわっ！」

一か八かの賭けだった。

膣内射精だけは回避しなくてはならない。その夫にしか許してはいけない妻としての最後の一线を守るため、身の保身を一番に考えるであろう西村の小心さに訴える。

「うっ、うおおっ、うおおおおおっ！」

躊躇のためか。計算が働いたのか。男の動きが一瞬止まった——しかし、すぐに動きが再開される。中のペニスがもう限界の硬度に達していた。これではもう、射精を止めることなどできない。

爪を立てて畳を掻き、結合を解こうとしても無駄だった。激しいセックスの果てに、グズグスになっていている身体では、射精直前の息みきっている男の腕から逃れることなどできない。

中に出すか、外に出すか——全ては西村に委ねられた。

「うぐっ！」

「あつ、ああつ……そんなところに……つ……こ、擦りつけて……あつああつ……」
 紗羽子の口から間欠的に声が漏れるのだが、それは熱いペニスを、アナルが強く感じたタイミングと完全にリンクしていた。

排泄孔の入り口で、舌で舐められた時とは違う種類の愉悅が弾ける。まるで焦らされてでもいるような、肉の芯から疼くような刺激だ。それに合わせて、びくびくと尻全体が痙攣するのだが、そのたびに谷間を擦る男根を挟んでしまい、より相手を悦ばすことになる。

——ああつ。なんで私……こんな場所……こんなにも……。

アナルは排泄器官である。決して性欲を満たすための部位ではないはずだ。なのになぜ、舐められたり擦られたりするだけで、これほど気持ちいいのだろうか。

——こ、これで……。

ペニスで貫かれでもしたら、どれほどの愉悅を味わえるのだろう。四肢は拘束されている。自分は抵抗のしようがない。

犯したいなら、犯せばいいではないか。

そこまで考えてハツとする。

肛悦に堕ちかけていた自分に気づき、紗羽子が縛られた両手を強く握り締めた時、

それを見越したような悪魔の囁きが背後から浴びせられた。

「ケツマ〇コに、おチンポぶちこんでくださいっておねだりしろ」

男がねちっこく尻の谷間ズリを続けながら命令してくる。紗羽子は不格好な姿勢で為すがままにされながら、首を横に振った。命令される以前に、自ら肛門性交を欲した汚らわしい記憶を追いだそうとする。

しかし、身体は正直だ。

ぬめった灼熱棒で入り口を擦られ続けるアナルからは、頭の芯までジンジンと響くような強烈な疼きが発生し続けている。

その部位で、過去に経験したことのない極上の快感を得られることを知ってしまった熟れた女体にとつて、それはまさに拷問だった。

腹を空かせた人間の手足を縛り、目の前で分厚いステーキを焼く行為に等しい。

アナルから絶え間なく響いてくる未知の疼きは、鉄板で焼ける香ばしい牛脂の匂いである。そして股間の全てをたっぷりと濡らすドロドロの愛液は、いくら口を閉じても溢れ出る涎であつた。

「ほれっ、こんなにモノ欲しそうにケツ穴ヒクヒクさせてる癖に、何恥ずかしがってるんだ？ ほらほら、さっさと言っちまえよ。命令だぜ」

命令。

それはあまりに耐えがたい肉悦に苛まれている人妻にとつての福音だった。天使の囁きの如き甘美な響きとして、煮立つた頭の中に染み込んでくる。

自分は嫌なのだ。しかし夫の夢を、二人の生活を、ホテル柳船楼で働く従業員の生活を守るため、この下劣な男に従わなければならぬ。

——み、皆のためなの……。こ、これは……。仕方がないことなの……。

この身を挺して——不浄の小穴を差し出してでも、皆を守らなければならない。

いつしか紗羽子の中で、根本的な価値観が逆転していた。如月に犯される言い訳に柳船楼の持ち出ししている。

それに気付けないほど人妻の女体は——アナルはさらなる刺激を求めていた。

「……ケ、ケツ……マ○コに……おチン……ポ、ぶちこんで……ください……」

声が激しく震えている。それは屈辱のためなのか、疼ききつた肛門にもたらされる肉悦を期待してなのか、自分自身でも区別がつかない。

「ふん。いいだろう」

それを聞いた如月は、自分の口車に乗って、自ら魂を差し出す愚かな人間を見下す悪魔のような笑みを浮かべていた。その顔を見た瞬間、先ほど自分の聞いた福音が、

実は悪魔の囁きだったということに気付く。

「あ、あの、やっぱり——んはあああああ！」

何もかもが遅かった。

夫にすら許していない肉器官に、他人のペニスがめり込んでくる。

「あぐああああああつ！ つふおおおおおつ！ んほんほおおおお！」

紗羽子は両目を大きく見開きながら、拘束された手足をビクビクと痙攣させていた。肉棒が皺穴にめり込んでいく際に発生する摩擦感。それに合わせて、全身の神経を灼き切るような強烈すぎる肉悦が迸り続ける。

たつぷりと舐め尽くされた括約筋は、凄まじい抵抗を示しながらも陵辱者の侵入を許してしまう。

——すごいっ！ おしりの穴がぎぼぢいいいいい！

一瞬よぎった後悔など、この圧倒的な快感の前にあつさりと吹き飛んでいた。

見開いた瞳の奥では、交わってはならない肉と肉が交錯するために炸裂している禁断の花火が上がり続けている。それは如月の下腹と自分の尻が密着するまで続き、男の全てを受け入れた時には、自分の垂れ流した涎の池に頬を浸していた。

「は、はへえ……んはあ……つ……つはへあ……」

紗羽子の瞳に宿っていた、老舗旅館を取り仕切る女将としての風格は涙と一緒に垂れ流れ、今は威厳の欠片もない。

「ほれ」

如月に身体を抱えられると、肛門で繋がったまま仰向けにされた。背中を男の腹に乗せたまま不格好な姿で揺さぶられる。

まるで赤子が後ろ向きで高い高いでもされているような状態だ。身体が上下に動くたび、根元まで食い込んでいるペニスが肛門の内側を擦り、未知の愉悅を人妻の女性に送り込む。

「どうだ。ケツハメ、気持ちいいだろう」

「き、気持ちっ……いいいいっ……」

思ったままの感想が口から漏れた。普段はきりりと引き締まっている厚めの唇が、今はだらしなく半開きになっている。肛門を男根で貫かれたファーストインパクトが薄れ始めると、火照った身体の疼きがさらに激しくなってくる。

身体が求めている——もっともっと快感を。さらなる愉悅を。

しかし手足は帯で拘束され、しかも男の腹の上へのせられた状態では自分では何もできない。

「ほら、どうして欲しいンんだ？ 自分でちゃんとおねだりしな」

それをまるで見透かしたように如月が背後から囁いてくる。

紗羽子はすでにアナルファックの衝撃で、理性は吹き飛んでしまっていた。頭を占拠しているのは、排泄孔に深々と刺さったペニスでさらなる愉悦を貪ることばかり。

「う、動いてえっえ……も、もつと……っ、つづけてえ」

「それじゃあわかんねえぞ。もつとケツをズボズポして欲しいのか？」

女将はガクガクと顔を縦に振っていた。我慢しきれない被虐の現実を脳が淫猥に捻じ曲げて、強烈な肉欲を湧き立たせている。

「ちゃんと言葉でおねだりしな」

続けて命令された。自分でおねだりしろ、と。だからおねだりする。

ホテル柳船楼の従ギョウインのせいかつをまもるため……。

受け入れがたい現実を受け入れるために、人は自分にすら嘘をつき——そして騙す。「ああ、お、おしり……ずぼずぼ……おしりズボズポして——っひいひい！」

突然動き始めた男のために、セリフの後半は愉悦の悲鳴に変わっていた。

「あああつ！ いいつ、ズボズポいいつ！ きぼぢいひいっ！」

アナルで炸裂した信じがたい愉悦の爆発に、心の底から叫んでいる。肛門は排泄器

官ではなく、男の肉を唾え込み快感を得るための器官なのだ。今までの紗羽子の常識を根底から塗り替えるに充分な、それは肉悦の衝撃であった。

「ほれ。もつとサービスしてやるぜ」

如月は右手に楕円の形をした物体——ローターを握っていた。

左手で乳房を鷲掴みにしながら、ヴウウツと振動音が聞こえるそれを、二人の交わる股間に差し向けてくる。今の紗羽子は官能に狂う一匹の牝獣だ。普段ならば眉を顰めるようなそのアイテムを、期待を込めて見つめていた。

「あつ、ああつ……それで一体……はっ、はぎい、んほっ、んはあああつ！」

パンティを穿いた上からローターで女性器を擦られ、漏れる声も獣染みている。その薄皮を通した振動のもどかしさも、肛門で炸裂する愉悅を高めることとなった。

男の為すがまま肉体を揺さぶられる。

胸を好き勝手に揉まれながら、女の秘部を玩具で弄られる。

両手、両足を拘束されているために、自分ではどうすることもできない。この全てを相手に委ねてしまう隷属の心地よさが、若くして老舗旅館を取り仕切ることとなった紗羽子の心身のストレスを溶かしていく。多くの人の上に立つには二十九歳は若すぎた。しかし新たな官能を貪るのにこれほど適した歳はない。



それが自身の女体を骨の髄まで蝕む、毒とも知らずに――。

「も、もつと……んはあぁっ！ も、もつと動いてっ！ 激しく突いて！」

女盛りを極めた肉体は、これまでの価値観を全てひっくり返すほどの性の喜びに打ち震えていた。なんて気持ちいいのだろう。肉体にもたらされる具体的な愉悦だけではない。背徳的な言葉を叫ぶたび、眉間に突き抜けるような快感が迸る。

こんなハレンチなセリフ、総一相手には絶対に言えない。相手が夫以外の男だからこそこの快感は味わえる。愛する男がいるにもかかわらず、他の男に抱かれるからこそ、その肉の交わりが甘いのだ。

それはまさに禁断の果実。

如月に身体を求められた時は、総一の妻という現実が心を苛んだ。それが今、最高のスパイスとして肉悦の味をより刺激的なモノへと変えている。

紗羽子は自分が人妻である本当の意味や価値を、初めて知った気分だった。

「んほおおおっ！ アソコらぎぼぢいいい！ ケツアナもつとぎぼぢいいいっ！」

まるで自分がアナルとヴァギナだけの存在になったように感じている。股間から迸る快感に、他の全ての感覚が塗り潰されていた。

愉悦の涙で滲む視界すら、性の閃光で何度も白く塗り潰されている。そんな中、肛

門を貫く肉の熱さが、官能の業火に燃える女体でもはつきりと認識できていた。

「これがホテル柳船楼の、評判の美人若女将の姿とはな。へへへっ。他の客にも見せてやりたいぜ」

西村にも同じことを言われた。

自分も女だ。多少、そのような目で見られることは意識していた。しかし、自分が考えている以上に、男たちはこの身体を好色な目で見ていたのだ。

ホテル柳船楼がメディアに取り上げられると、いつも決まって自分は、美人若女将として紹介されていた。

直後、決まって客数はそれなりに伸びた。ただの宣伝効果だと思っていたが、中には如月の言うように自分目当ての客もいたのかもしれない。

髪を上品に結い清楚な顔付きをしている癖に、その和服を盛り上げているのは匂い立つような肉感的な女体である。

案内を終えて部屋を出ていく自分の後ろ姿を、あるいは廊下ですれ違う自分の横顔を、彼らはどんな視線で見ているのだろうか。

明らかに接客の礼を言う男たちは、紗羽子の視線が逸れた直後、和服の下で息づいている女の肢体に向けて、粘りつくような暗い視線を向けていたのかもしれない。

又ボつ、ぬぼぼつ又じゆくちゆボつ。

股間の二穴を埋められて、休みなく責められ続ける。喘ぎ疲れた紗羽子の声は掠れ始め、それでもなお愉悦を叫び続けていた。

「おらっ！ イキそうなんだろっ！」

如月の声に紗羽子はガクガクと顔を縦に振っていた。

イク。自分がどこかにイツてしまう。

溢れる愛液や官能の涙と共に、貞淑な妻を演じていた岬紗羽子がこの肉体から流れ出てしまう。この高まりきった官能の果てに待っているのは、総一とのセックスでは決してたどり着くことのできない至高の領域だ。

拘束されている手足が稼働できる範囲でめちやくちやに動き、女体で渦巻いている快感の凄まじさを少しでも発散させている。無意識に両手を強く握り締め、足先の白足袋が嫌でも丸まり、ふくらはぎが激しく痙攣した。

「あああつ！ いっ、いいいいいっ！ ケツアナずぼずぼきもちいいい！ ケツアナ、ずぼずぼつイツちやうのおおおおおおつ！」

心の底から叫んでいた。そうすればもつと気持ちよくなれると思ったから。

イク、と。ケツアナ気持ちいい、と。本能の赴くまま叫んでいた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
来かねる場合がございます。お問い合わせはメールでもお手数ですが再度お問い合わせください。
- ◎二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

VALKYRIE



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry



<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille
ミルフィーユ



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!